

氏 名	小谷 由美
学 位 の 種 類	博士（教育学）
学位記の番号	甲第 191 号
学位授与年月日	2016（平成 28）年 3 月 21 日
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	田中耕太郎における「国家」と「教育」 —カトリック自然法思想からの再構成—
論文審査委員	主査 今井康雄 （教育学専攻 教授） 副査 岩木秀夫 （教育学専攻 教授） 副査 齋藤慶子 （教育学専攻 准教授） 副査 森田伸子 （本学名誉教授） 副査 荒木慎一郎 （長崎純心大学教授）

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、田中耕太郎（1890~1974）の思想を戦後の教育学の文脈のなかに位置づけ、その教育思想としての特質を明らかにするために、田中が「教育」と「国家」の関係をいかに捉えていたかを、1930 年代から 60 年代までの時代状況との関連で分析するものである。

田中は、戦前から戦後にかけて法学者、政治家、裁判官として活躍したが、その活動を背後で支えていたのはカトリック自然法の思想であった。しかしながら田中の教育思想に関する先行研究の多くは、その思想の独自の背景には触れつつも、戦後の教育学主流の枠組みに沿って田中の思想を裁断してきた。そこでは田中の持つ保守的な一面が強調され、田中の教育思想はもっぱら批判の対象として位置づけられてきた。田中に対する批判的評価は、とりわけ「逆コース」と呼ばれるような戦後教育政策の転換後に決定的となった。国家による教育の支配・統制に対する教育学の側の懸念が強まるなかで、田中の主張は、「国家の教育権」を認める著しく国家寄りの思想として批判の対象となったのである。

しかしその一方で、戦後の教育学は、終戦直後に田中がその立法に深く関わった教育基本法の理念については、民主主義的な教育を志向するものとして高く評価してきた。田中は教育基本法第 1 条の「教育の目的」を「人格の完成」とすることに主導的な役割を果たした。その文言—特に「人格」の意味づけ—については議論があったものの、教育の目的規定の重心が国家ではなく個人の側に置かれたことについては、教育学において肯定的に評価されてきた。

田中は、戦前期の論稿においても、国家主導の学校教育に対し家庭の教育が優先されるべきで

あるという考えを示していた。つまり田中は戦前期から、国家にのみ教育権があるという主張を否定しており、国家からの「教育権の独立」さえ主張していたのである。田中も、戦後の教育学主流と同様に、戦中期までの「国家」による「教育」の一方的な支配・統制の関係を否定していたと考えることが妥当である。とすれば、戦後の教育学主流と田中の決定的な相違はどこにあったのであろうか。両者の離反の背景には、カトリック自然法に立脚し、そのために「国家」と「教育」の関係を対立したものとしては捉えない、田中の独特な国家観・教育観があったと考えられる。

本論文は、以上のような見通しに立って、1930年代から1960年代に至る田中の論稿を分析する。その際、先行研究では多くを論じられてこなかった田中のカトリック自然法思想に着目することにより、田中の教育思想と戦前の国家主義との違いを明確にするとともに、戦後の教育学主流が主張した「国民的教育権」論との違いをも明らかにする。そしてそのことを通して、田中の教育思想における「国家」と「教育」の独特の関係構造を浮き彫りにすることを試みる。

まず、序章では問題設定の背景として、戦後教育史において通説となってきた「国家」と「教育」の関係把握を概観し、その通説の枠には収まりきらない田中の思想の特質について述べた。次に、田中の教育思想に関する先行研究の検討を行い、本論文の課題である田中における「国家」と「教育」の关系到接近するために、具体的な課題として次の三点を設定した。第一に、本論文の全体をとおして田中の思想的特質であるカトリシズムならびに自然法について考察すること。第二に、戦後教育学が構築してきた理論枠組みと田中の教育思想を比較検討すること。第三に、田中の思想と同時代の思想的・教育的現実の関係を問うこと、である。そしてこれらの課題に、以下の4章構成によって接近を試みた。

第1章「田中耕太郎の思想形成過程とキリスト教」では、田中の生い立ちから思想形成過程に目を向け、田中がカトリックのイデオログとしての地位を獲得するまでの過程を跡づけた。一高時代に新渡戸稲造の教養主義から影響を受けた田中は、その後に内村鑑三によりキリスト教と出会い、内村門下として無教会主義に傾倒するものの、やがて内村から離反、カトリックに改宗する。田中のこうした信仰の変化と自然法論者として自己を確立するまでの過程を、思想の大きな変動期であった大正期の思潮を背景として考察した。

第2章「昭和初期の思想状況とカトリシズム」では、カトリックのイデオログとしての田中の戦前・戦中期の言動について考察した。田中は昭和初期の思想状況を「思想的アナーキー」と呼び、大正末期から昭和初期にかけての社会状況のなかで興隆してきたプロテスタンティズムやマルキシズム、1930年以降にあらわれた過激な国家主義思想を、カトリシズムの立場から批判的に捉えていた。田中はマルキシズムとプロテスタンティズムによって「思想的アナーキー」が生みだされていると見ていたが、それは、この両思潮が日本の社会のなかに自由主義、個人主義、主観主義の傾向を助長していると捉えたからであった。田中によれば、この「思想的アナーキー」の状況こそが、過激な国家主義が生まれる土壌となっているのであった。

第3章『教育基本法の理論』にみられる田中耕太郎の教育思想」では、以上のような戦前・戦中期の田中の思想展開を前提に、大著『教育基本法の理論』を中心として戦後の田中の教育思想を考察した。具体的には、田中の教育目的論、人格概念、教育権論の三つを焦点として、戦後教育学の理論枠組みとの比較検討を行い、田中の議論の教育思想としての特質を浮き彫りにすることを試みた。

教育目的論については、田中がキリスト教的ヒューマニズムに立脚した「個人の倫理化」を教育の目的として捉えていた点に注目した。戦後の教育学主流が、「民主主義」「全面発達」といった終点のない理念で教育目的を構想したのに対して、田中の「個人の倫理化」は自然法的な秩序の存在を前提としていた。「個人の倫理化」によって、田中は戦後日本の「思想的道徳的空白」にくさびを打ち込もうとしていたのであった。

人格概念については、田中のそれがカトリシズムの人間観に立脚したものであったことの教育的意義を考察した。戦後の教育が民主主義を支える人間の形成をめざしたのに対し、田中は民主的な人間を政治的人間の一つの類型とみなし、教育はそれを超える「全人」の形成を目的とすべきだと主張した。この主張は、完成された人間を「神の似姿」に求めるカトリック的な人格概念を前提としている。ドグマ的とも見えるこうした田中の人格概念は、しかし、教育がその時々
の国家の政治的決定に奉仕する結果をもたらした戦前・戦中期の過ちを繰り返さないために、教育の理念に確固たる自然法的基盤を与えることをめざすものであった。

最後に、戦後の教育学における中心的な論点の一つであった「教育権」の問題をめぐって、田中の教育権論の特質を明らかにすることを試みた。戦後教育学の主流である「国民の教育権」論と田中の教育権論は、「親の教育権」を基盤にしている点で共通していた。しかし、「国民の教育権」論が近代的・啓蒙主義的な人間観に立ち「子どもの学習権」を軸に立論されていたのに対して、田中の議論は両親の「権威と愛」を軸に立論されており、その背後には自然法的秩序に照応する場としての家庭の観念があった。また、「国民の教育権」論が「国家」と「教育」を基本的に対立するものとして捉えたのに対し、田中は、国家もまた自然法的秩序にあずかっており、家庭に対して二義的ではあるが教育権を有するとした。以上のような立論上の相違は教職の位置づけにおいても大きな相違をもたらしている。田中は、「教育権の独立」を担保するために教師が専門職としての地位を確立すべきだとしたが、教師の専門職性の根拠を、両親の委託をうけて子どもを教育するというその使命に見た。戦後教育学の主流が教師の労働者性と専門職性を両立させようとしたのに対し、田中は、政治的な自己主張の自制によってこそ、教師は司法職なみの専門職として自立しうるとしたのであった。

第4章「近代日本における宗教と道徳教育の問題―田中耕太郎における自然法思想と道徳」では、道徳教育をめぐる田中の議論を検討した。田中が教育勅語の擁護者であり、それが教育学主流からの批判の的となったことはよく知られている。田中は、教育勅語の内容は自然法にかなうとして擁護していたものの、教育勅語が「勅語」という形式をとり法的拘束力をもっていた点を

批判し、その徳目主義的な側面がもたらす弊害を説いてもいた。田中は、道德についての「唯名論的立場」がかえって道德的価値の決定を国家に委ねる帰結をもたらしたと見て、道德的価値が国家や個人を超えて客観的に存在するとみなす「実念論的立場」の必要性を説いた。ただし田中は、本来カトリックにおいて重視されるべき「共通善」には言及していない。この点は、カトリックの復興をめざしたヨーロッパのネオ・トミズムとは異なっていた。田中の自然法思想は、日本国家の枠内にとどまり、教育勅語の解釈にみられたように天皇制の批判に向かうことはなかったものであり、ここに田中の思想の限界を見ることができる。

最後に終章で本論文の論旨をまとめ今後の課題を提示して本論文の締めくくりとした。本研究によって、戦後の教育学主流とは異質な思想的基盤をもった田中の教育思想の特質をある程度明らかにすることができたと考える。今後は、政治や司法に関わる田中の具体的活動にも考察の視野を広げることが課題となろう。

論文審査結果の要旨

本論文は、これまで部分的・断片的にしか論じられてこなかった田中耕太郎の思想を教育学的な観点から包括的に論じており、大きな意義をもつものと言える。その成果は、単に修行時代から戦後に至るまでの田中の思想展開を詳細に跡づけたというだけではない。また、言及されることはあっても主題的に対象化されることのほとんどなかった『教育基本法の理論』に正面から取り組み主要な論点を体系的に抽出したということにとどまるものでもない。田中の思想展開を一貫してカトリック自然法思想という観点から再構成し、それを戦後教育学という文脈に位置づけ直すことによって、本論文は、戦前・戦中期の国家主義的教育思想に戦後の民主主義的教育思想を対置する従来型の解釈図式の枠内では見えてこなかった、教育学上の様々な論点を浮上させている。それはたとえば、「人格」という目的を支えるものは何か、と問う教育目的論であり、人を教育するという権能をわれわれはどこから引き出すことができるのか、と問う教育権論であり、政治や社会の転変に耐えうる倫理の基盤をいかに構築するか、と問う道德教育論である。

このように、本論文は、田中耕太郎という半ば忘れられた、そしてカトリシズムに立脚するがゆえに日本的文脈に組み込むことが容易ではない思想家に敢えて着目し、その思想展開を地道に跡づけることを通して、従来の通説的な教育学理解からは見えてこない重要な論点を浮き彫りにすることに成功している。田中の主張の事実史的な文脈についてはなお解明の余地が残るものの、田中のテキストの読解は手堅く、参照される先行研究の選択も的確である。国際司法裁判所に転出して以後の田中の活動を射程に入れた今後に向けての課題設定は当を得たものであり、研究の一層の発展が期待される。本論文は全体として、教育哲学・教育思想史の方法論に立脚した人物

研究によって田中耕太郎という特異な思想家に了解可能な一貫した思想像を与え、そこを立脚点とすることで現代の教育学に新たな視野を提示しており、教育学における思想研究の可能性を示す優れた研究と言える。

以上により、本論文は博士(教育学)の学位論文としての水準を十分に満たしていると評価された。